2023, 3, 20

自民党「こども・若者」輝く未来創造本部　視察資料

幼保連携型認定こども園として展開する
多機能で総合的な子育て支援拠点

学校法人まゆみ学園

認定こども園まゆみ

認定こども園子どもの館

認定こども園まゆみぷらす

企業主導型保育園こどもの家

2 沿革

昭和33年1月　正慶寺本堂にて「まゆみ幼児園」開園（創設者：古渡義秀・君子）

昭和44年3月　「まゆみ幼稚園」設置　認可　定員80名（個人立）

昭和46年3月　宗教法人立へ変更　定員120名

昭和55年1月　学校法人「まゆみ学園」設立、3月　学校法人立へ変更

平成7年4月　無認可保育所「こどもの館　中里保育園」開設・・・❶

平成13年1月　学校法人で全国初の認可保育所「子供の館　中里保育園」認可・・・❷

平成17年4月　文部・厚労省共同「総合施設モデル事業」に「まゆみ幼稚園」と「子供の館　中里保育園」が選定される・・・❸→まゆみ幼稚園を幼児教育部（3歳児～5歳児）、中里保育園を乳児保育部（0歳児～2歳児）とし、2施設を一体で運営する幼保一体化事業に挑戦

平成19年4月　認定こども園法が施行され、「まゆみ幼稚園」を認定こども園「まゆみ学園　幼児教育部　まゆみ幼稚園」へ、「中里保育園」を認定こども園「まゆみ学園乳児保育部　子供の館・中里保育園」へそれぞれ名称変更・・・❹

平成27年4月　子ども・子育て支援新制度施行を受け、二施設を統合・再編。幼保連携型認定こども園「まゆみ」（定員95名）と保育所型認定こども園「子どもの館」（翌年1月に幼保連携型に）へそれぞれ変更・・・❺

平成29年4月　認定こども園「まゆみ」　定員120名へ拡大

平成30年4月　幼保連携型　認定こども園「まゆみぷらす」開設　定員180名
同園内に　地域・子育て支援センター「ぷらす」　開所

令和元年12月　企業主導型保育園　「チャイルドケアハウス　こどもの家」開園　定員30名
同園内で病後児保育事業も開始

令和3年7月　認定こども園「まゆみ」内に児童発達支援事業所「マーブルハウスまゆみ」開所　定員10名

令和4年4月　認定こども園「まゆみ」が現在地へ移転　定員150名へ拡大
児童発達支援事業所「マーブルハウスまゆみ」も移転　定員15名に
同園内に地域子育て支援センター「Den」開所

まゆみ学園の歩みは、「子どもに保育と幼児教育を一体で提供したい」との思いを実現する試行錯誤でした。無認可保育所を作り、学園内の二施設連携で幼保一体化しようと借金8800万円で保育所開所❶。6年後に認可保育所❷になったものの幼稚園と保育所の制度の溝は深く、職員間に分断が発生。総合施設モデル事業で夢の幼保一体化に再び挑み❸、保育園の3－5歳児を3キロ離れた幼稚園の教育時間（9～13時）に毎日送迎する試みも。次第に幼保文化の融合と深化が進み❹❺、多様な子育て支援事業の展開へつながりました。

3　学園施設概要

●施設内運営事業

認可	運営施設	敷地(㎡)	延床面積(㎡)	定員(人)	園児数(人)		職員数
平成27 (2015)	幼保連携型 認定こども園まゆみ 	6,830	1,592	150	1号	51	31
					2号	43	
					3号	37	
					合計	131	
	●二本松市子育て支援拠点事業 地域・子育て支援センターDen				23,827 (年間延べ利用者数)		3
	●児童発達支援事業所 マーブルハウスまゆみ			10(1日)	27 (利用者数)		3
平成28 (2016)	幼保連携型 認定こども園子どもの館 	693	534	75	1号	9	25
					2号	37	
					3号	27	
					合計	73	
平成30 (2018)	幼保連携型 認定こども園まゆみぷらす 	7,724	1,784	180	1号	62	31
					2号	78	
					3号	36	
					合計	176	
	●二本松市子育て支援拠点事業 地域・子育て支援センターぷらす				10,007 (年間延べ利用者数)		2
令和元 (2019)	企業主導型保育園 チャイルドケアハウスこどもの家 	426	304	30	17		9
	●病後児保育事業				16 (年間延べ利用者数)		
令和5 (2023)	学校法人まゆみ学園本部 放課後児童クラブ アフタースクールまゆみ	認定こども園まゆみ旧園舎を活用し 令和5年度から4年生～6年生の 学童保育を運営					

4 まゆみ学園理念

まゆみ学園の運営理念
運営体制を一体的・一貫的に対応するために3つのキーワードで包括的に構築する

インテグレーション

異なる複数のものを組み合わせ「統合」すること。
幼児教育・保育・子育て支援及び各施設の連携・職員一人ひとり3つのキーワード等を「統合」すること。

インタラクション

「相互」行動を起こした時、一方通行にならず相手側の行動に対応しリアクションをする。
相談システムを活用し8の字サイクルで対応及びPDCAを活用しさらなる改善

インクルージョン

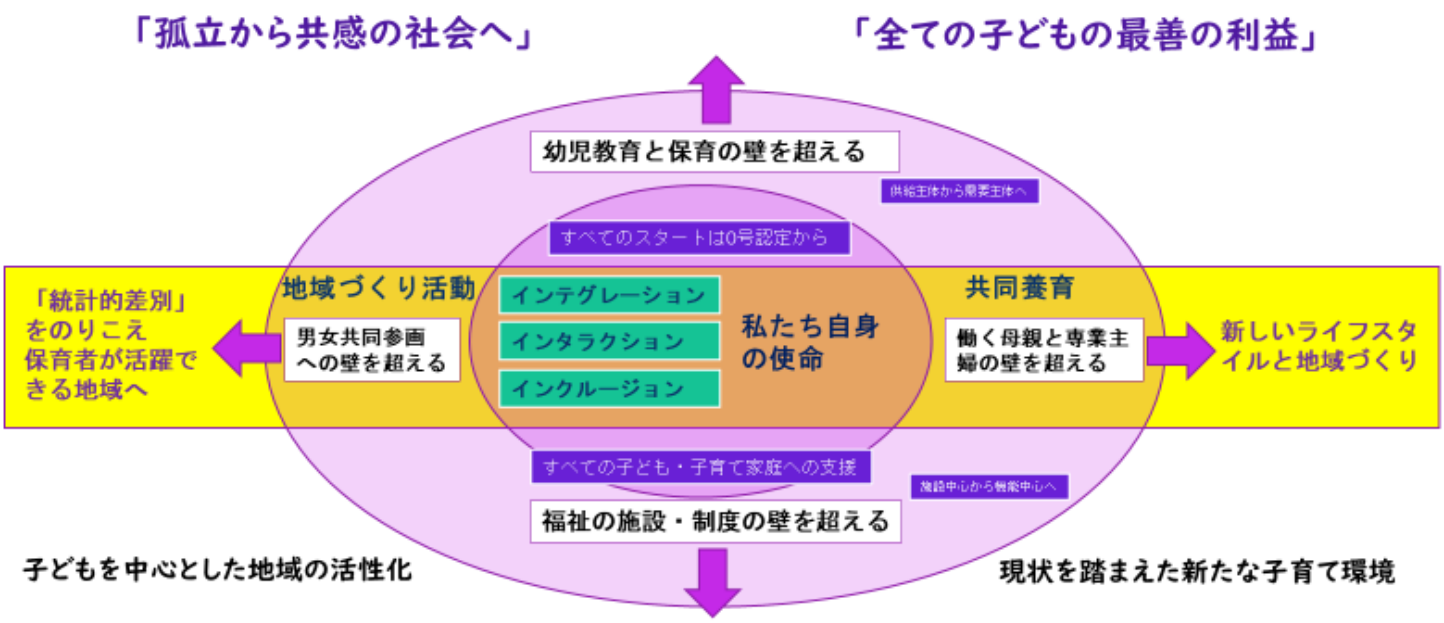
社会を構成するすべての人は、多様な属性やニーズを持っていることを前提として、性別や人種、民族や国籍、出身地や 社会的地位、障害の有無など、その持っている属性によって排除されることなく、誰もが構成員の一員として分け隔てられることなく、地域であたりまえに存在し、生活することができる社会。インクルージョン、（社会的） 包摂、包容ともいう。

分離教育＝排除

「インクルーシブ教育」とは、こうした「排除」を行ってきたことの反省の上に立って、「障害のある子も無い子も共に学び、共に育つこと」ができること、 最初から分けずに包みこもうという概念。つまり、どんな障害や病気（あるいは他の事情）をもつ子どもでも学校から排除されず、共に学びあえるような学校を権利として保障しようとするもの。

「インクルーシブ」の反対は「 イクスクルーシブ 」。「排除的、排他的」という意味です。

一体的・一貫的 認定こども園の創造を基本理念としてまゆみ学園の柱とする。



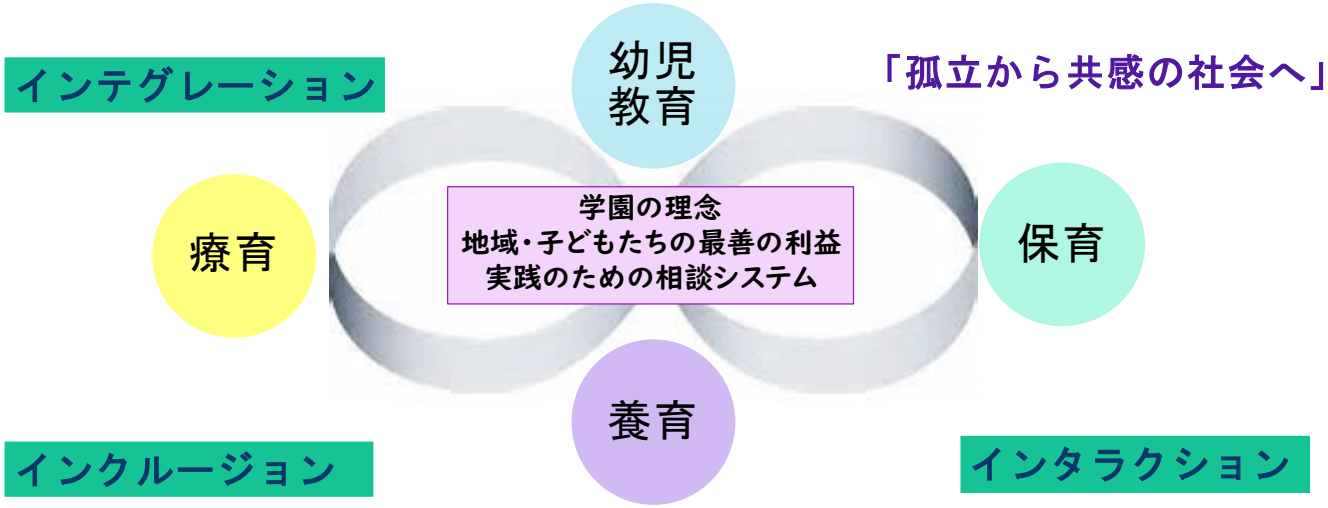
共生型ケア（「幼老型ケア」）児童発達支援等・保育需要ピーク後への対応

「中央大学 宮本太郎 資料」「遊育 吉田正幸 講演引用」資料に古渡 加筆

幼保連携型認定こども園としての8の字サイクルと相談システム

教育・福祉施設の壁を越え 協働・共感・共用・共有

幼保連携型認定こども園＋地域・子育て支援センター＋企業指導型保育所＋病後児保育＋児童発達支援事業



幼保連携型認定こども園の内部組織の相談システムの構築

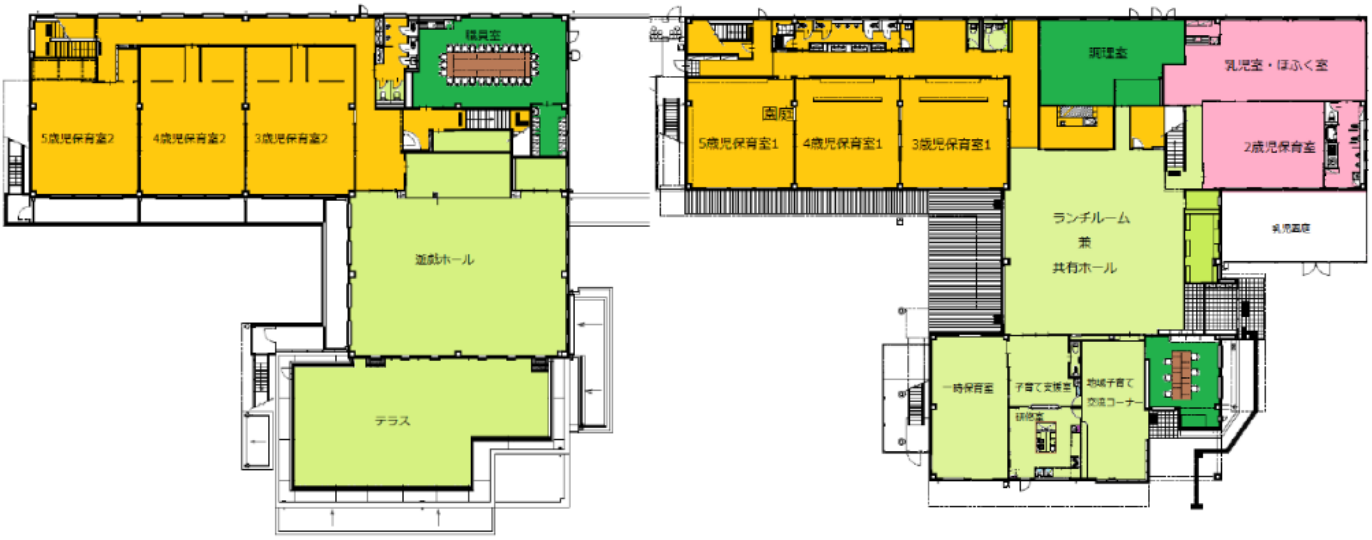
幼保連携型認定こども園3施設を中心とした機能
少子化・人口減少社会に於ける認定こども園は、まち・ひと・しごとの拠点施設機能

5　幼保連携型　認定こども園まゆみぷらす＋地域･子育て支援センターぷらす

平成３０年４月開園「認定こども園まゆみぷらす」は、イギリスの「アン・テイラー・チャイルド・センター」の総合機能を参考に、平成１８年以降の認定こども園における教育・保育・子育て支援施設の具現化を実践。認定こども園法の目的「～地域における創意工夫を生かしつつ、小学校就学前の子どもに対する教育及び保育並びに保護者に対する子育て支援の総合的な提供を推進するための措置を講じ、もって地域において子どもが健やかに育成される環境の整備に資することを目的とする。」を基本とし、平成２７年度認定こども園法の改正後、幼保連携型認定こども園機能と地域・子育て支援センターを併設し、一施設に集約した施設として運営。

特色は、施設中央に認定こども園と地域・子育て支援センターの共有ホールがあり、子育て支援センター利用親子と在園児０～５歳児が保育や行事を共有し共通の遊びを楽しむ、交流カフェ・栄養相談・育児相談・離乳食教室・両立支援・地域の方の昼食会・リサイクル支援など様々な活動を展開している。

センターを年間 15,000 人が利用している。



2階　　1 階

遊戯ホール

シューズクローク

事務室

地域・子育て交流コーナー

子育て支援室・研修室

一時保育室

厨房

クッキング保育室

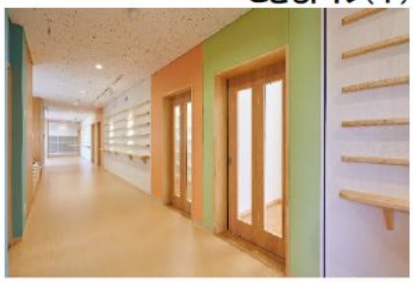
乳児室・ほふく室

2才児保育室

こどもトイレ（1）

手洗いコーナー

3～5才児保育室


1階廊下

こどもトイレ（2）

2階廊下

3～5才児保育室

3～5才児保育室

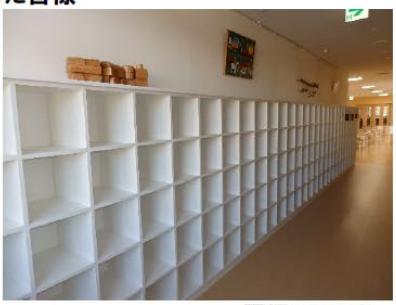
遊戯室

職員室・会議室

こどもトイレ（３）

●備品整備にあたりご協力いただきました皆様

SOULABO 様


園児用ロッカー

園児テーブル

とちのき

テーブル・いす

木の店 ステラ 様

PLANTS 様

乳児用いす

壁かざり

木のおもちゃ

ついたて

虹の森 様

福島こどものとも社 様　福島ひかりのくに 様　ふくしまワンダー 様　共学社 様（順不同）

福島原発事故後の食材放射能測定について

【導入の経過】

平成 23 年（2011）　二本松市で、小中学校、幼稚園、保育所の校庭土砂、自家消費用農産物の測定を開始。

平成 24 年（2012）8 月　認定こども園 子どもの館に放射能測定器設置。
二本松市委託事業として、8 月からは給食に使用する米、同 11 月からは食材の測定を開始した。

平成 30 年（2018）5 月　認定こども園 まゆみぷらす新設に伴い、給食室内に放射能測定器を設置。測定を開始した。（二本松市委託事業）

【測定機器】

機械名　食品放射能測定システム（日立アロカメディカル株式会社）
項 目　セシウム（137） セシウム（134） カリウム　ヨウ素
検査結果　福島県産食材にセシウムが検出された。
検出例 平成 27 年（2015）しいたけ 5.88 Bq
（基準値 3.04 Bq）セシウム 137
平成 27 年（2015）どんぐり 66.7 Bq
（基準値 4.94 Bq）セシウム 137

【まゆみ学園の給食食材】

原発事故以降は県外産を使用。放射能が検出された場合は、数値の大小にかかわらず、使用を中止し返品した。検出される食材は限定され、ほとんどの食材からは検出されなかった。
検出された食材も、乳幼児の摂取基準 50 Bqを超えるものは無かった。
当初は食品への不安を口にする保護者が多かったが、次第に県内産の食材も食べている方が増えてきた。
県内産の食材は基準値以下のものが流通されており、県内農家を支援する意味も含めて平成 30 年（2018）4月から学園給食での県内産食材使用を再開している。

●放射線量モニタリングポスト

○認定こども園まゆみ旧園舎園庭、認定こども園子どもの館園庭には、平成 24 年（2012）4 月から「放射線量モニタリングポスト」が設置されている。

測定値例 平成 24 年（2012）　0.6μSv（ポスト）～4.8μSv（芝）
令和 5 年（2023）3 月 0.079μSv（ポスト）

認定こども園　まゆみぷらす近辺の発展

H29(2019).1　本体工事着工時

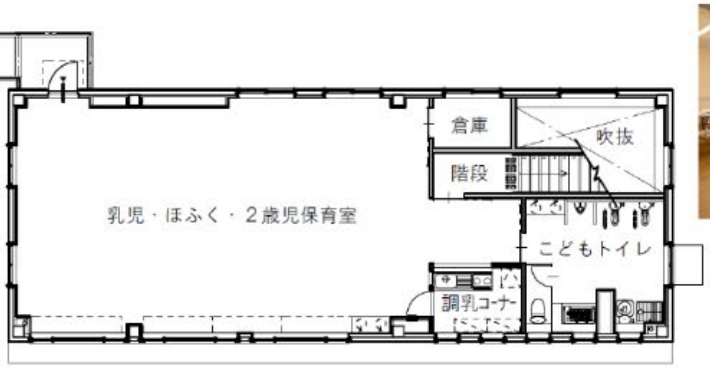
H30(2018).1　完成時

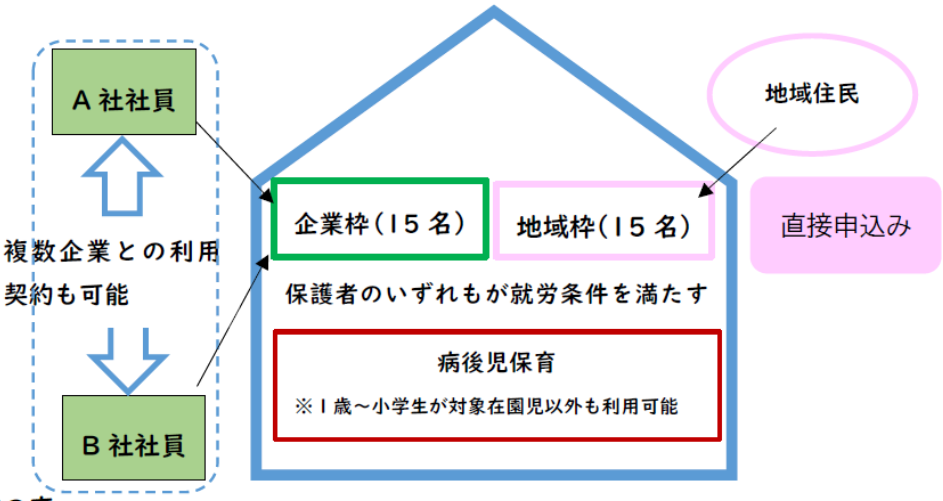
R4(2022)　現在　(Googleマップ)

6　企業主導型保育事業　　チャイルドケアハウスこどもの家

事業の目的

従業員の多様な働き方に応じた保育を提供する地域の企業などを支援するとともに、待機児童対策に貢献することを目的とした企業主導型保育事業に賛同し、学校法人まゆみ学園の 5 番目の施設として、企業主導型保育園チャイルドケアハウスこどもの家を令和元年１２月に開園。
企業を支援するだけでなく、核家族や共働き家庭の子育てを支援することを目的とし、同時に病後児保育事業も開始した。





・契約企業の方の声

・キャリアのある優秀な人材の流出を防ぐことができて良かった。

・早期に育児休暇の職員の復帰を果たすことが出来た。

・子どもを預けられることがきっかけとなり、新たな人材の確保ができた。

・自社の福利厚生の内容について見直すきっかけとなった。

・これまでの利用者数

	在籍数	企業枠		地域枠	市外
		自社	共同利用		
令和元年	11 人	3 人	0 人	7 人	3 人
令和 2 年	24 人	7 人	2 人	15 人	5 人
令和 3 年	24 人	5 人	3 人	16 人	5 人
令和 4 年	19 人	4 人	2 人	13 人	3 人

・利用者の方の声

・認可施設から保留通知が届き、仕事復帰は無理だと思ったが、利用することができ助かった。

・居住の市の保育施設が勤め先と逆方向にある為、出社時間に間に合わない。通勤方向に利用できる保育施設があって良かった。

・これまでの利用状況

	利用者延べ人数	市　内	市　外	病　　名
令和元年	17 名	5 名	12 名	急性中耳炎、急性胃腸炎、急性気管支炎など
令和 2 年	25 名	25 名	0 名	気管支喘息、溶連菌感染症、急性上気道炎など
令和 3 年	50 名	39 名	11 名	急性上気道炎、RS ウィルス感染症、喘息、感染性胃腸炎など
令和 4 年	16 名	15 名	1 名	急性咽頭炎、感染性胃腸炎、退院後の回復のため　など

令和 5 年 3 月現在

・利用者の方の声

・核家族で日常的に頼れる人がいないので、預けられるところができてよかった。

・仕事に復帰したばかりで、連日、休みを取るのは心苦しかっただけに有難い。

・仕事の研修があり、どうしても休むことができないので助かった。

・術後の体調・食事の管理をしてもらえるので、安心して仕事ができる。

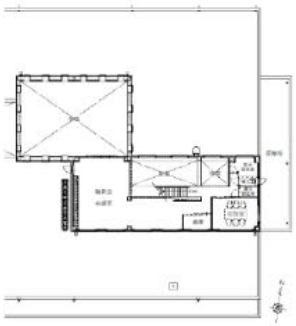
・今後の課題

・病後児保育事業について、市内の小児科医の理解を得ること。

7　認定こども園まゆみ
地域子育て支援センターDen
児童発達支援事業所マーブルハウスまゆみ

幼保連携型認定こども園として、地域の子ども・子育ての現状を踏まえ培ってきた機能の発展型が（新）「学校法人まゆみ学園認定こども園まゆみ」。認定こども園法及び子育て支援の施行規則を踏まえフルパッケージ機能として、今後の「児童福祉法の改正」や「子ども家庭庁」保育政策の課題を見据えて、少子化時代に対応できるまゆみ学園として、更なる教育・保育・子育て支援の機能の発展こそが少子化時代であっても地域の発展に必須な保育施設である。

まゆみの旧施設は、令和５年度放課後児童健全育成事業（学童保育所）・放課後等デイサービス・学習支援施設として新たな子ども施設として歩む予定。



2階

１階

玄関

乳児・幼児交流ホール

事務室

0歳児保育室

1歳児保育室

2歳児保育室

こどもトイレ(1)

廊下(1)

廊下(2)

3歳児保育室

4歳児保育室

5歳児保育室

こどもトイレ(2)

遊戯室

厨房

地域・子育て交流コーナー
〔地域・子育て支援センターDen〕

〔地域・子育て支援センターDen〕

職員室・会議室

児童発達支援室
〔マーブルハウスまゆみ〕

中庭

〔備品整備にあたりご協力いただきました皆様〕

テーブル・椅子〔木の店ステラ〕

とちのき 〔木の店ステラ〕

グランドピアノ〔日野屋楽器店〕

ヘキサゴン・コミュニティプール
〔星野工業〕

園庭遊具 〔アネビー〕

飾り棚・ロッカー〔SOU LABO〕

福島こどものとも社　ふくしまワンダー　PLANTS　虹乃森（順不同・敬称略）

8　地域・子育て支援センターDen

事業の目的

二本松市からの子育て支援拠点事業としての委託を受け、学校法人まゆみ学園2施設目の、『地域・子育て支援センター』として、令和4年4月に開所。

少子化、核家族化、共働き家庭が増え、子育て家庭の状況が変わる中、新型コロナウィルス感染拡大の影響で様々な問題が生じ、孤立や不安を抱えながら、たくさんの悲鳴をあげている子育て家庭。認定こども園内に支援センターを設置することで、認定こども園と協働の機能を合わせ『子育て支援』という社会的役割を担う。

　また地域の交流拠点として、保護者の方の共同養育の場となるよう、地域みんなで子育ての楽しさや大変さを共有・共感しながら、孤立しない育児・子育てを支援する。

・センター内に交流カフェスペースを設置（ミルク用のお湯・ドリンクバー有料・レンジ利用可）

子育て支援センター内に、交流カフェスペースを設置することで、利用者の方がゆっくりお茶（コーヒー）を飲んだり、お昼を持ってきて食べることができる。

利用者の方たちからは、

『センターだと、ほかのママたちがこどもを見ていてくれている間にゆっくりお茶を飲むことができるのでうれしい！』との声が多い。利用者同士、育児の悩みなどを話している様子が見られる。

支援センター内にカフェスペースがあるところも少ない。

・こども食堂テイクアウト　　1食200円　　月3回夕食として提供

まゆみ学園では2016年（平成28年）から子育て世代の親子や、孤食の子どもや地域の方の居場所作りを目的に、『二本松市まゆみこども食堂』を設立。会食形式で行っていたが、新型コロナ感染症の拡大により、令和2年5月よりテイクアウト（お弁当）での配食に変更。野菜やお米など、地域の方からの寄付により低料金で提供。調理には、学園スタッフのほか、地域のボランティアの方に協力いただいている。

・プチカフェランチ（気まぐれこども食堂）　大人200円　こども無料　週3～4回実施

週3～4回のプチカフェランチ（気まぐれこども食堂）の提供をはじめ、子育ての食育の一環としてのランチの提供をし、子育ての伴走型支援として実施。多くの方の利用がある。利用者の方に調理を手伝ってもらうこともあり、子供の面倒を見てる人と、調理を手伝う人と担当を利用者同士で決め、まさに共同養育の場となっている。

・パパたちの支援センター開放 day・支援センターまつり（月1回日曜日に開催）

年4回の支援センターまつりでは、育児用品リサイクル・0円スーパーが人気。日頃足を運ぶ機会の少ないパパにも、足を運んでいただく機会となり、また家族同士での交流の場にもなっている。

・認定こども園の行事に一緒に参加

こども園の行事、七夕会・お月見会・クリスマス会・だんごさし（小正月行事）
豆まき会など、こども園の行事に支援センターも参加することで、季節の行事に触れることができ、利用者の方からも大変喜ばれている。

・そのほかの事業

・絵本の読み聞かせ・リズム遊び　・身体測定・栄養相談　・親子制作
・みんなの給食会　・お誕生会

・利用者の方の声

・利用時間・組数等、制限されないのがありがたい。
・里帰り出産で二本松に戻ってきたが、他県在住者は利用不可のところが多いので、利用できてよかった。
・プチカフェ（気まぐれこども食堂）があり、ほかのママやお子さんと一緒に食事をすることで、いつもよりしっかり食べてくれている。また、家での献立のヒントになりうれしい。
・相談事があるときに、センタースタッフだけではなく、こども園の管理栄養士・看護師等にも相談できるので、ありがたい。とっても心強い。
・ちょっとした用事があるときに、お母さん同士でセンターで子どもを見てもらうことができるので助かる。
・こども園とつながっていることで、園の様子を見ることができ、こども園での保育・教育の様子が見れるのは参考になる。
・家で、子供と二人きりでいるより、センターに来ると、同じ悩みを持つお母さんたちやスタッフと話をすることで、みんな同じ悩みを持っていること、悩みや辛さ、楽しさを共有・共感してくれる人がいることが何よりうれしい。
・家だと、コーヒーを淹れても、バタバタしていていつの間にか冷めてしまうが、センターのカフェだと、こどもを見守ってくれている人がたくさんいるので、出産してから初めてゆっくりコーヒーが飲めた。

・令和4年度　支援センター利用者数

令和4年4月～令和5年3月17日まで

利用者延べ人数 24,049 名

9　認定こども園まゆみ内 児童発達支援事業所「マーブルハウスまゆみ」

■設置までの経緯

保育室から飛び出す子、集団活動に参加したがらない子、着替え・食事・排泄などに不器用さがある子など、同年齢の活動への参加が難しい園児は以前から見られたが、2011年3月の東日本大震災と原発事故の後、心理的に不安定な子、落ち着きがない子、クラスに馴染めない子など、様々な困り事のある子どもが一層増加した。また、自分の子の発達に不安を感じる保護者、園児への具体的な支援方法がわからないといった保育者の戸惑いも増えている。

そうした子どもの状況を踏まえ、こども園内で通常の保育と児童発達支援を一体的に行い、多様な子どもの育ちを包摂して支える「インクルーシブ保育」を展開するため、認定こども園まゆみの建て替えに伴い、新園舎内に児童発達支援事業を併設することになった。これにより、「特性のある子どものための職員の加配」ではなく、発達支援の専門職を置いて支援の専門性を高めつつ、専門スキルを園全体のために生かすことができるようになった。

■発達支援の目的

発達に特性のある子どもたちも、地域で成長し生活していくために必要な社会的スキルを身に付けることができるよう、専門職員が「遊び」を通した個別の療育を行っている。

“マーブル“とは「原石」のこと。「特性を持ちながらも、それを活かし、原石を磨きつつ自分らしく輝いて生きてけるように」との思いが込められている。

クッキング

■特徴～認定こども園の中に併設

こども園と事業所の玄関を一つにして、多様な子どもが分け隔てなく交流できる環境を作った。こうした児童発達支援事業所は県内でここだけ。玄関を入ると現れる多目的の交流ホールは、児童発達支援事業所、こども園、地域子育て支援センターが一か所で交流できる結節点となっており、一体で活動を行うことができる。

■インクルーシブ保育

専門的支援が必要な子も、こども園で集団のかかわりを経験しながら、それぞれの力を発揮できる成長を目指している。療育の場が孤立した環境にならないよう、園の職員と多職種の連携により必要に応じた個別の関与や遊びを検討しつつ、特性ある子も受け止める「インクルーシブ保育」に努めている。集団の場にいながらも、個々の特性に配慮された環境があることで自分の力を発揮することが出来ている。

お集まりの風景

■子ども園との連携、こども園併設のメリット

毎日の職員会議で園での生活・遊びの様子を聞き、マーブルでの過ごし方を伝えて情報を共有する。合理的配慮や具体的な支援方法について意見を出し合い、検討することができる。日々の保育ですぐに実践し、次の職員会議で実践後の様子を報告し、すぐ相談して対応することが出来る。

やきいも

■利用者、職員の声

〇保護者の声～

・同じ建物にこども園とマーブルがあり、園生活の一部としてマーブルを利用できて安心感がある。園の先生とマーブルの先生たちで情報共有がされていて、状況に応じた対応がされていることがありがたい。

・就学前の ASD の子のため、児童発達事業所を探していてここを知った。わが子は友達に興味を示したことがない。ここなら友達や集団生活を身近に感じることができるのではないかと思い、利用することにした。

・家庭でも「ありがとう」や「〇〇していい？」と言葉でのやり取りが増えた。

・癇癪が減り、意思疎通が取りやすくなってきた。

〇こども園のクラス担任の声

・利用前は表情が乏しく不安な様子が見られていたが、マーブルを利用し始めてから表情が明るくなり笑顔で登園できるようになった。

・問いかけに答えることが出来ないことが多かった。クラスの活動でも友達の様を見ているだけだったが、マーブルに行くようになってから「〇〇していい？」など自分からの発信が増えた。

〇職員からの声～

・定員を超える利用希望者がおり、職員不足で毎日でも利用したい子などに対応しきれていない。

〇利用児の声・様子

・利用日を楽しみにしている。クラスに戻った時にも生き生きと遊ぶ様子が増えた。

・クールダウンする場所として短時間だけ過ごし、気持ちを切り替えて戻っていく子もいる。

■ 事業内容

開所日

・月～金曜日
・土曜日は面談及び必要に応じて開所
・※ただし12月29日～1月3日を除く

時間

・開所時間：午前8時00分～午後5時30分
・サービス提供時間：午前8時30分～午後3時30分

定員

・1日 10名

職員体制

・保育士・幼稚園教諭
・社会福祉士
・作業療法士
・臨床心理士兼アドバイザー

活動のスケジュール

自立活動

多機能トイレ

■ 利用料金

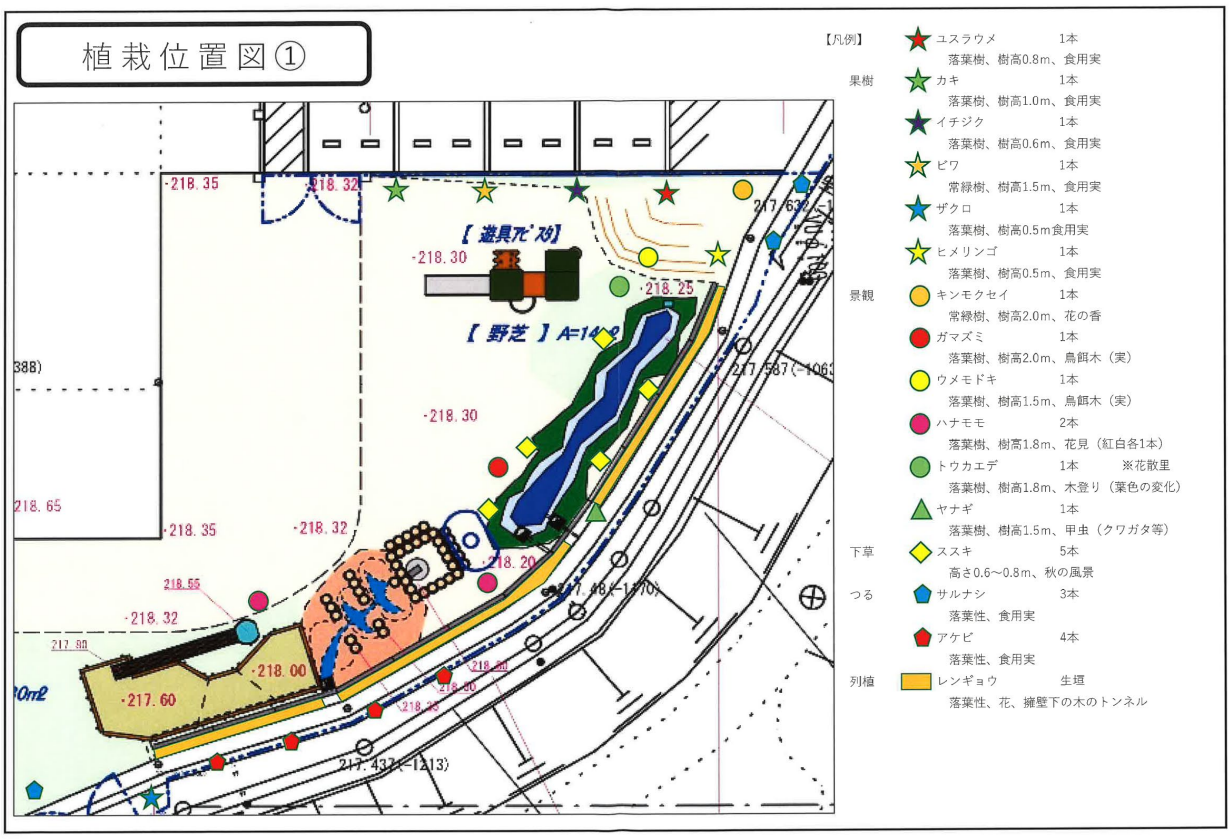
利用者の自立支援法サービス受給者証の記載内容に基づき利用料金をお支払いいただきます。自立支援法に基づく利用料金の 1 割分が、自己負担となります。

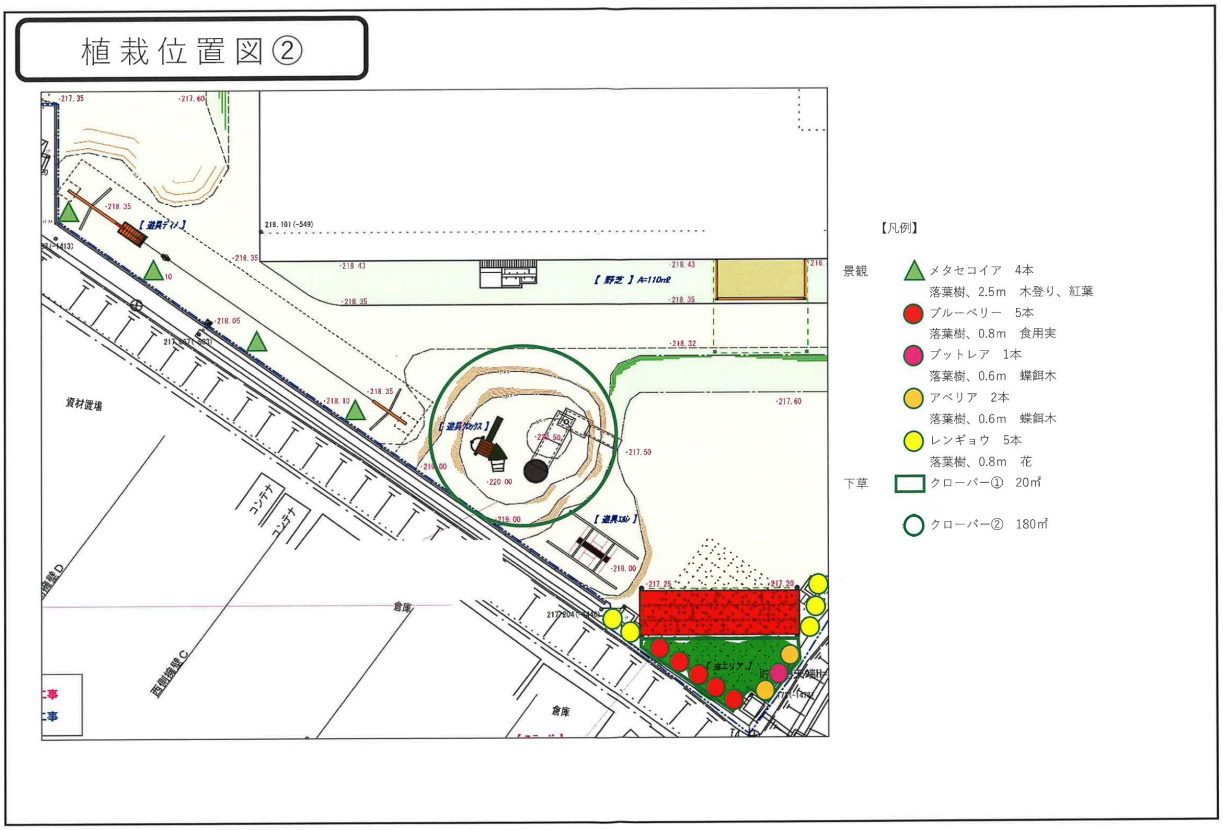
ただし、児童発達支援事業は、幼児教育の一貫として位置づけられているため、自己負担分が無償化の対象となります。

■ 概要

【令和3年度・7 月開所】	【令和4年度・現在】
・在籍数18人（学園内18人 園外0人）	・在籍数27 人（学園内17人 園外 10 人）
・定員 1日10名	・定員 1日10名
・職員 3名	・職員 4 名
（保育士・幼稚園教諭・言語聴覚士・児童指導員）	（保育士・幼稚園教諭・言語聴覚士・社会福祉士・臨床心理士兼アドバイザー）

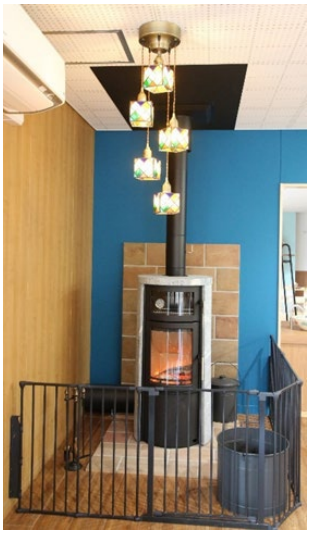
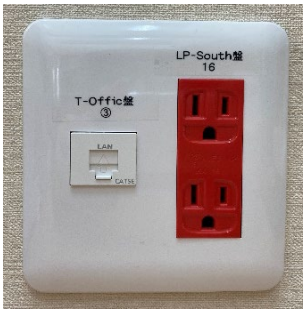
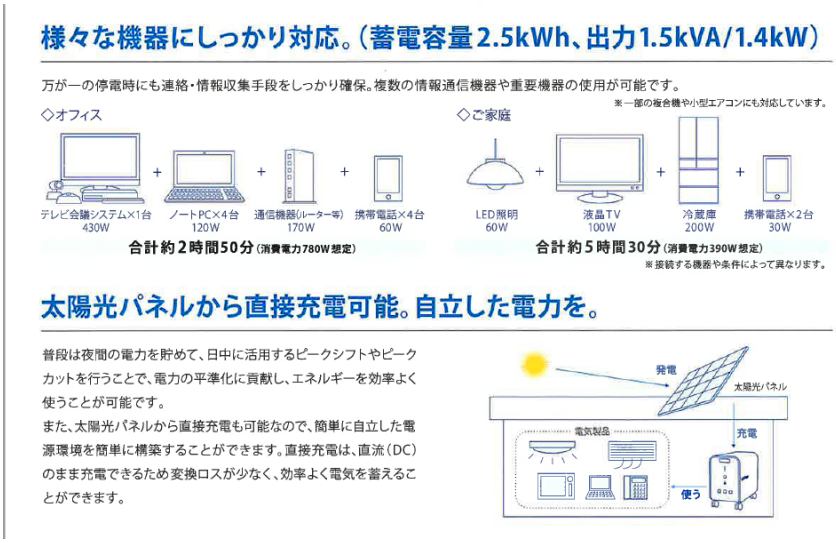
10 園庭遊具・植栽配置図





11　災害時に対する施設機能

3．11東日本大震災・原発事故以来　この地域における非常時・災害時の子ども施設はどうあるべきか、そして災害時の子どもや妊婦さんの居場所のための模索として平成 30 年「まゆみぷらす」の建築時は水の確保をテーマに地下水（飲料水）自動給水装置並びガチャポンプ1．5トンのタンクを設置、停電でも1・5トンの水を確保、その水はビオトープに使ったり、夏場の水遊びでは水をふんだんに使うことが出来た。また冬には消雪用にも使えいろいろ応用できる。今回の新施設にも同じ考え方で地下水を確保し遊びの応用も考慮した物を設置。

3．11はまだ春が遠く雪も降る時期だった。電力がストップするとほとんどの電化製品が機能しない。暖を取る方法は石油ストーブやファンヒーターもあるが電気を使わない方法として薪ストーブを設置、自然にも優しい物であり火の大切さや温もりも伝えることができる。また輻射熱の効果で暖房効率を上げることができる。

また、災害時は電力が回復するまで、最低限の施設機能を保つことが重要と考えている。玄関にて発電機を始動➡玄関に設置した非常用発電機電源盤から事務室に電気を供給するシステム。野外活動でも活用できる大型の蓄電池など、今までの災害経験からまゆみ学園として最低限必要なものとして設置。